

北海道草地研究会 20年の歩み

帯広畜産大学教授 吉田 則人

本研究会の設立目的は、畜産の基盤である草地に関する学術の進歩をはかり、併せて北海道における農業・畜産の振興、発展に寄与することでありまして、昭和44年11月10日、北海道農業試験場において第1回の設立総会並びに研究発表会を開催し、今日まで19回に及ぶ発表会あるいは検討・討論会を重ねて参りました。

現在、会員数は名誉会員6名、正会員505名、賛助会員35団体で構成されており、会員の所属は研究機関、行政機関、農業団体、関連業界並びに畜産農家と多様なものがあります。

本研究会は20年を経過しましたが、この間における北海道の土地利用型畜産の動行をみると、乳用牛頭数は40年当初の32万頭から80万頭と2.5倍、肉用牛頭数は1万4千頭から24万頭1.7倍に飛躍的に増加しており、これらの家畜の基礎飼料を生産する草地並びに飼料作物畑は25万haから現在では61万haと2.4倍に拡大されてきております。

この様な北海道畜産の発展を背景にする本研究会の活動状況の詳細は、年1回刊行される会報に記載されておりますが、今日、これを再読する時、その発展過程は昭和40年代と50年以降とに大きく2期に分けることができると思います。

勿論、全般的には年1回の研究発表会における一般講演の研究報告が基本でありまして、今日まで会報に収録された貴重な報告は554編を数えるに至り、しかも年々、増々充実したものになっております。

この一般講演の外に、昭和40年代においては、その時期での先端をうかがう特別講演を10編、また、その時点までの研究経過を整理した抄録を15編お願い致しております。

さらに、草地畜産・大規模経営が展開している主要地帯を舞台にして現地研修会を行ない、各地域の草地農業の実態と問題点を会員各位に把握・理解を頂くということで、天北・根釧・道南・日高・十勝地域において実施したのであります。この参加人員は延500名以上にも達しております。

そして、昭和50年代におきましては、草地農業に関連する諸問題を、体系的・優先性そして農家からの要求度などの観点から課題を整理し、専門領域を異にする研究者あるいは実務者を含めたシンポジウムを開催することに研究会運営の力点をおくことにしたのであります。その課題をあげてみますと、

飼料需給の限界・その可能性

自給飼料の生産性推移と問題点

環境条件からみた草地・飼料作物の生産性

粗飼料の品質と飼料価値

草地更新

粗飼料の低コスト生産・利用

アルファルファの栽培・利用

草地主体の肉用牛飼養

牧草の生産性向上と育種の役割

飼料用トウモロコシ栽培・利用

以上 10 課題で、何れも土地利用型畜産を展開するための最重要課題であります。この参加人員は延 1,800 名以上に達しております。

また、昭和 53 年に日本草地学会大会が北海道で開催されましたが、これを機会に基金を得まして、北海道の草地並びに飼料作物に関する試験研究および普及に顕著な業績をあげた研究者・指導機関に対し、北海道草地研究会費を贈り表彰することいたしました。これによって、現在まで 4 名の研究者と 3 指導団体が受賞されております。

北海道草地研究会においては、以上申し述べましたような事業ならびに運営を行なって今日、20 年を経緯して参りましたが、本研究会は北海道における体系化した土地利用型畜産の確立を目標として、その基盤である草地並びに飼料作物の高位生産、そして低コスト飼料生産給与に向けての技術的開発のため、会員各位それぞれの立場において努力している処であります。